時代映画
江戸刀鍛冶

五郎正宗
東京市淺草區馬道町二丁目拾壹地
テラオフヤ

A一、三二の写　丸善　一〇九三円

有朋堂　十五年出版
十一年出版

西京　西京

銘刀鍛冶

孝子美談　五編

全四巻　毋五場

マークと塙割

第一　郷士の娘刀鍛冶に恋す　八幡社額堂

〃二　行光お秋を娶る　行光仕事場

〃三　銘刀を鍛へんと誓ふ　八幡宮社前

〃四　舅の情けに京へ出立　秩父宿外れ

〃五　行光御番鍛冶と成る　九條殿館

〃六　美しき侍女の双袍　金長廊下

〃七　後日の証據は医師の短刀　三條橋詰

〃八　産婦が臨終の遺言　五尺史住家

妖の間拾ヶ年経過

第九　孫の行末を頼む　小田原街道
〃十　桶屋の腕白小僧　行光住居内外ニ場
〃十一　行光五郎を弟子とす　桶屋見世
〃十二　五郎親子の名乗り　行光住居
〃十三　お秋嫉妬の怨言　お秋居間
〃十四　生傷の絶間無し　仝台所
〃十五　又復継母の折檻　仝寝間
〃十六　孝子雪中に水行す　井戸端と台所ニ場
〃十七　お秋愈〻五郎を憎む　元の寝間
〃十八　孝子身を投げんとす。　由井が浜辺
〃十九　往来中で兄弟喧嘩　雲の下町端
〃二十　男嫁の悪心に怒る　国光住居

勝山巡三　玉井製

第廿一　五郎母に急を告る　金中と住居ニ場
〃廿二　孝子の一心継母の悔悟　八幡宮石段
〃廿三　桶正成の使者　行光住居
　　再び五ヶ年経過
〃廿四　五郎銘刀を鍛いあるる　井戸端と仕事場ニ場
〃廿五　五郎桶家へ伺向する　桶正成館
〃廿六　三尺の秋水銘名も何のその　仝館庭前
〃廿七　庭前に怪しき女性　九條殿館
〃廿八　銘刀の威徳怪鳥を退治す　空中と山中ニ場

登場名

一、五郎正宗　ア、弟六左近太夫行光
一、太森川右馬之丞　ム、神職平太夫

一、堂守の老婆　女　娘お秋後に行光の妻
一、●△行光弟子定吉　△　仝留造
一、○仝三太　○　女中お作
一、ア関白九條殿　○　藤原式部太夫
一、女関白姫君　女　侍女　楓
一、△△楓の父五太夫　ア　母　清
一、女行光一子新太郎　○　侍女実は怪鳥
一、○桶屋甚兵衛　△　乞者竹庵
一、女新発吾国光　ア　仝女房おりつ
一、●△樹　正成　女　嬶男　正行
一、△家臣江見郎良三　女　牛飼舎人四人
一、侍女大勢　侍医大勢

勝山通三　玉井製

一、仕丁大勢　一、町人大勢

時は後醍醐天皇の元弘建武延元年間の出来事

タイトル

第壱　郷士の娘刀鍛冶に恋す（八幡社額堂）

相州鎌倉八幡宮額堂の体（頼朝造営以前の古社）

爰に床几二脚並べ堂守の老婆神職望越半太夫

と語り居る。

折柄扇ヶ谷の郷士森川右馬之丞は娘お秋を伴ひ

出で来り休む。老婆茶を出す。

半　是は〳〵右馬之丞殿御息女御同道にて

御詣りで御座るかふ

右　オヽ御神職半太夫殿でムったか

其後は無沙汰を致ールムる

半　それはお互でムる。夫れに就ても何時もたくら

お秋殿のお美しさ、嘆かし諸方から御縁談

勝山通三　玉井製

もムろうふ

右　否々何と申すも御覧の通り不束者

未だ良縁もムらぬがおぞ当りもムらば

是非御世話が願ひ度い。

秋、アレ若し父上様往来中で其様ふ事を……。

右　否、ハハハ……宜いわヤ何うで一度は持たねばふ

らぬ良人じゃわ、

喃半太夫殿

半　左様でムるとも、午前も精々御世話致す良い婿殿を

お世話致すでムらう。

イヤ思はぬ長話を致した

お帰りには午前方にて御休息下され。

右 **恭ふ存ずる**

是にて半太夫は一礼して退場

此の時雲の下の住人刀剣鑑定家六行光朝の様

刀を包みし風呂敷包を持ち出で来り

行 夫れにお居で成さるは森川彬でムりますと伝ふ

右 **オ、行光殿が是ゥ〜。**

シテお手前も御参詣かふ

行 はい、実は兼ねて御訛への短刀が鍛ムりまして

只今御宅様へ持参致しました処当方へ御参詣

と承りお跡を追ふて参りましたでムります

右 **夫れは〜御苦労で合った。デハ早速拝見致うかふ**

ウム適当業物イヤ恭け無い〜

何と娘美事ふものであらうがふ

秋 ホンニまあ立派ふ好いお刀でムり弁ふア

そんふら女ン方が……

お秋恥かしきコナシ

右 **さして何時も私が噂をする兼六行光殿と云ふて**

雪の下の刀鍛冶じゃ。 御機嫌色せい。

行光殿是が手前の娘でムる。

行 是れは〜 初めてお目に掛りますする

毎度市ニイキニ預り弁て有難ふ存弁る

秋 私が秋と申す不束者何分宜しゆお願い申弁

右 時に行光殿色々市礼も致し度いが、手前の

宅迄御越し下されぬか。

勝山通三 玉井製

行　はい有難ふは存じ奉るが今日はちと急ぎの仕事を拘へて居り奉れば明日にも又改めてお伺を致し奉る。

右　左様ふら然らば明日は是非お出ヤされ。

秋　此度お待ち申して居り奉る。

行　ハイ、必ず御伺い致しまする、デハ失礼仕る是でお別れ申奉る

と行光立去る、お秋恋慕の体にて見送る。

右　茶代は是へ置くぞよ、

デハ娘そろ〳〵参らうかい、是娘、是サ娘〳〵

お秋ッ

と肩を打つお秋恥かしき、コナシにて顔を隠す。

勝山通三　玉井製

右　ハテ何を見て居るのじや、ハッハッハッ

―○―

第弐　行光お秋を聚る（行光仕事場）

雪の下の刀鍛冶行光住居仕事場の体

行光は弟子の足吉を向ふ槌に廻し刀を鍛って居る。　其の時神職半太夫急ぎ来り

半　オ、行光殿御に か。　イヤ目出度ッぞ〳〵。

行　是はどふたかと思いましたら半太夫様、目出度とはお祭りでも出来ますか

半　イヤモウ祭り処の騒ぎでは無い、　モット目出度いあふたの刃の工。　日本一の果報者じゃ。

好い花嫁が出来たぞよ。

行　ハーア花嫁とはそりや誰ぢでムるふ

半　是れ行光殿落ち着いて居る処じや其い相手は名に負ふ爾ヶ谷で一万石田地持。その一人娘が其方を見かけてスッカリ惚れ込み夫れからコッチはブラ〳〵病ひ。恋わずらひ迫させるとは罪じやぞよ

行　何を下らぬ事を、今日は仕事が忙しい。冗談ふら、おいて下され。

半　其の方の出世と云ふものじや。よもや不承知はあるまいがふ。

行　いや不承知ぢや、其那縁談ふら何うぞ断って下され。

半　エ、其の良縁を断れとは

行　ヲヤ肖ふれ共其方行光様の御祝刀をも鍛へる大事ふ望ある者他の家へ養子に行くヲじやムらぬ。トット茲を帰らっしやい。是れ定吉半太夫殿を門口迄お送り出せ。

定　ハイ。　コウ〳〵神主さん　お帰ふさい。

其の時右馬之助お秋を連れ来る。

右　アイヤ　こゝれも方　御待ち下され。

行　オヽ　貴方は森川様

右　貴殿を養子にと思ひしは拙者一生の誤りでムる。定めし御気に召すまいが改めてお秋を送り申すでムらう。御受け取り下され

勝山通三　玉井蔵

行　苟雅ふ存じますが此の義は平に御断り申す

秋　最うあの上は

行　あゝ、是れ　早速に事を（見物をなさる）

半ム、幸いあの金盥で頭を殴んで死んで見せるわ

定　コウ〳〵飛んでも無い　そんな真似をしちゃいけない

秋　何うぞ放して殺して下さりすせ

行　名々様多に爰は放し　ませぬぞ

秋　ソンナラ　私の顔をば

行　それじゃと云ふて、其儀ばかりは

一同　サア〳〵

枯　是非共得心下されよ

定　親方お収の一番考（者）だぞ。

行　ウム　見る影も無い行先をば夫れ程迄の思召

如何にも世房にお貰い申さう。

秋　エ、スリヤ　お叶へふされて下さりするか

枯　何んにも云はぬ　赤けふい。

第三　鉛刀を鍛へんと誓ふ（八幡宮社前）

爰へ行先　お秋（女房の形へ）一子新太郎

当オ）乳母に抱かせ参指の態にて出で来る。

行　お秋や　坊は大層おとふしい様だの

秋　はい、好い心持でスヤ〳〵と寝て居り申るわいナア

行　オ、然うか、何にもせよお参りをするとしよう。

トミ人社前へ参り合掌ふし

行　南無八幡大菩薩、一生に一度行先が弗番鍛

勝山通三　玉井製

治に成れます様御利益御授け下さりませ。

秋　又二つには我子新太郎が身の行末お守り下さいませ

南無八幡様、〳〵。

ト両人礼拝ふし行かんとする女の時社の蔭より

右馬之丞出で来たり。

右　オヽ聟殿お秋今日は孫めが宮詣りじやのー

行　是れは〳〵舅殿共方様も御参詣ひなりましたか。

秋　父さん宜い所で御目にかゝりましたわ

右　ドレ〳〵孫めを一寸見せて下され　オヽ僅か見ぬ間に可愛うふり居つた。　時に行先殿今是れにて参り居れば一生一度の御奮錬治に成り度ことの願ひ就ては如何京都閑白九條殿の御

触蛮ーで日本国中の刀鍛冶に申つけ

恐れ多くも天方様の大君の御乎刀を**折たすと**

の事何と其方御へ入る心は無いか

行　はい御詞迄もありませぬ。是非納め度いと存

納れど何を申すも多勢の刀鍛冶、殊に京都へ

上り納は夫れ〳〵の手続き莫大の費用、私

如き未熟者には及ばぬ業かとあきらめて

居り納る。

右　其の気遣ひ無用に致せ　半続の端費用の

処は私の右馬之丞が担ひ致す

行　エヽスリヤ其方が仕の事を？

勝山通三　玉井製

右　サ、其の代りには天晴れ名刀美事注
上げて見せて下され
行　及ばず乍らも一心込めて鍛へ上げるでムリます
右　オヽそれ承つて光榮至極に　何かの事情
宅の上ゆるく相談致すと致さう
行　有難ふ存じ升る
右　オヽ孫よ泣くぶく　父の出立を待つが好いぞ
行　第四場　湯の情に京へ出立（秋沢宿外れ）
愛へ行先弟子二人に刀を入れたる小
さき唐櫃（告進を張り御用の札を附す）
跡より右馬之丞、お秋赤見を抱き迫
告進り来る。

行　男殿には御見送りの程恐入ってムります。
斯く京都へ上れまするも皆貴方の御厚し
恩決して忘れは致しませぬ。
右　何んの〳〵其ふには及ばぬ事一日も早く御
番錄治に成って呉れるが　私の楽みでムる
では急で参るがよいぞ。
行　左様ふれば見れにてお別れ致しまする。
秋　若し行先殿隨分途中気を附けて日出
度お帰り　立待ち神ろ
行　オヽお秋　そなたも留守中を大切に　坊の
面倒を頼むぞよ。
定　それぢや　親方　確かりやっておくれ　お茶参せ

行　オヽ貴殿も出字を頼んだぞ　長谷川

ば學御隙

行　オヽ、首尾能く帰国と待ち

第五、行光御番鍛冶

京都九條殿上段に関白　三字一行

られたる刀箱を前に一刀を横たへ

る平舞台に梅原式部太夫下座に

八行光平伏ふし其他侍臣大勢

居る。関白は一刀を前に

関　うム、天晴れふる業物哉　是ハ

の使　行光とやら面を上げよ

行　ハハ……。

ト行光恐るゝ面を上げる。

関　安度諸国の刀剣を持参ふしたる剣の内其の

方が鍛へし一刀恐らく並ぶ者ふし。　從って是

ふる御剣を恐れ多くも大君の御守り刀に奉

り今日改めて其方を左近太夫に仕官ふし当

年御番鍛冶を申し付くるぞ。

式　ハア……

ト墨附を受取り

式　是りや猶六匂作兼くも関白殿下の御朱

印有難くお受け致せよ。近う。

行　ハハア。ヲに余りたる御説、有難くお受

け致すでムリ弁る。

勝山通三　玉井製

関　扨の上は式部太夫彼に酒肴を取り出し貴
は一泊許し遣はせ。行光大儀であつたぞう
ト是れにて関白先に侍座し茶の奥殿
へ入る。
式　是りや秋六上々の帰前の首尾喰満足であらう
のう。
行　ハハツ。是も偏に貴方様の御引廻し厚く
御礼を申上げ奉る。
式　是りや、誰そあるお申付けた通酒肴持参
致せよ。
侍　ハハアー――
次の間より侍女大勢三宝に酒肴を持出る

る土器及肴等持ち出で行光の前へ並
べズッー後より侍女楓長柳の銚子を持て
立出る。
机　ハアー――左様ふれば失礼にら
ト机立寄り酌をなさんとして行光と顔
を見合せ両人はっと取り乱すなり。
机はふみ〳〵と酌をふす行光気を替へ
盃を頂き
行　有難ふ頂戴致すでムりませう。
式　オ、今宵は夜と共に過すが宜しぞ
第六　美しき侍女の外抱（全館長廊下）
爰に行光酒に酔い蹌踉として来り。

行　心嬉しく過したせいか　コリヤ大分酩酊致した
風に吹かれて醒すと仕やうか
ヨ、コリヤ一時に酔を発して、アツ痛ツ、ムウ
ト行光瀬の起りし体にて廊下に倒れる。

机　其の時侍せ机雪洞を持ち来り
オ、貴君方様は最前の帝方様大層帝苦し
みの様子、お気を慥かにお持ちなさりませ
モシ何うぞなされましたかアノ
ト介抱する、行光心づき、

行　オ、最前のおせ中の……　呑めぬ酒を
嬉しさの余り一杯二杯と過せしせいか俄に
起る持病の癇癪

机　それはまた喫お困りでムリませう　オ、幸
い持参の薬　是ハテと召って暫らくお気
をお鎮めなされませ
ト机は急き薬を出し水を飲ませ背を
さすり介抱する之に行光の癇おさまり
行　有けない帝　介抱　お蔭様にて激しい癇さし込
みもさまりまして　ムリ申す　お礼は言葉
にも尽されませぬ

机　幻体無い其の帝言葉　なれで　私の念
も届きイヤ何を　言ふな　此所はお廊
下身体が冷へましては　ムリませぬ　少しも
早う帝寝間にて帝休息あされませ

勝山通三　玉井製

行　何から何まで御親切に有難ふ存じます何
　　分宜しく御願の致します。
楓　左様ふれば是が御茶代致しませう。
　　ト立上り行かんとして曰く、とする。
楓　ア、モシ　お危ぶのふ（ト牛の取り男と入レ）
　　ムりまするぞへ
　　第七　後日の証拠に笠の紐刀（緑橋巷）
　　爰へ一足の黒牛綱を放れて狂ひ来りたる。牛飼四人追かけ来り。
　　牛は向へ逃げたぞ　必ず共に怪ぶ
　　ト四人マヤ〳〵

其時行先出て来る跡より楓被衣を引
　追ふて来りは其袖を招へ
楓　ア、モシ暫くお待ち下さりませ
行　シテオ前は何人でムリ舞るふ
楓　ハイ　是でムリまする
　　ト被衣を脱ぐ、行先びっくり
行　オヽ　昨夜計らず館にて
楓　ハイ　夢ナいお情け受けます氏、　其の時
　　さの忘れ兼ね　お跡を慕ふて参りました
　　御帰国遊ばすふらどうぞ是も共をお連
　　れなされてくださりませ

行　是はしたり　其もう云はるこは御もっとも此方共も
　　是はしたり、まう

身は大事ふ御奉公　又私とても御番解治
に仕官致けて　一段は国元へ帰らにやならぬ
ぬ刃の上　又来春は改めて出府へ上って来る
程は夫れ迄待って居て下され。

概　イヤ　其務ふ事仰有って御見捨さ
るお心か、御恨めしゆみり外ら。

行　ハテ聞訳無い。何で其務ふ事が有る
のか　そふたの疑い晴らす為め私が年ブガ
ら　鞍の　その結刀、又逢ふ迄の筐として
そふたに渡して置き外ぜよ。

概　そんなら之れを（ト結刀ヲ受取り）と
言ふ事ならめて御帰りなさい。私に

ず見捨て下さえすが

行　人目に分はば　互の身上　早去らば

ト行かんとするを縋り留め

概　ア、モシ　せめて御訣れにお酌とお名なお
聞のヒ下さりませ

行　オ、私が住居は東国にて
と云い捨てると後から（牛が放れた危
いぞ〜〜）と叫ぶ合ひ人大勢逃げ来
る之れに驚き行先は概を傍らの柳の
木蔭へ忍ばす然へ以前の暴れ牛
出て来ると行先の前に大牛を振ぜて
立塞がる。牛は猛然と行先を目にかけ

勝山通三　玉井製

んとする 行 見は左右に分れて中央に牛と
爭いとゞ面角に諸牛をかけ分ける中へ
正る。女は以前の牛飼舍人男を（り出
で来る夫れと見て
金 アラく嫌しや、よう牛を勾めこなされた
皆の唐衣を云へく
ト四人厚く礼を述べる。 楓 梅 蓬
より出んとするを行先眺めて
行 ア、コレ危い。必ず爰へ出るまいそもく
女時牛面じ暴れんとするをシカと押へ
行 ハテ後日の便りを（と牛を捻ぢ伏せ）
〃 待たつしやれ

金人は牛を押へる楓木蔭に立ち伏す
第八 産婦が臨終の遺言（五太夫住居、
京都嵯峨の南端に位する大ア住居、娘の
楓は産後の病に伏せる病人の枕元
お付菜を前に置く
五郎を抱き
やがて
子供達を抱り
ト
五 オヽ嬢よ何うやら目が覚めて居る様子
藤 元者人では何うじやお
楓 ハイ
子 オヽそれが元人ぶら私が起こしたやりはせう

五　コレ娘　急がずに徒くり呑むがよいぞよ

楓　はい有難う　ムリ御ざる　さうして坊は傅

に居りまする

清　孫めは私のうところにメヤク　貰って居ます

子供が心配せぬがよいぞや

楓　父さん母さん永らくの御外抱御苦労かな

清みませめ

五　ハテ何とおふくろの親子の中に遠慮はいら

ぬ　一日も早うよろこんで　親に面会させ呉れよ

楓　幼体無き禁断樹　花咲かぬ中は少女られ　其仇

を云ふにも母の重病、夫れにつけても御二人

様へ今迄御自みせしまーにが何をかくさう

莫大の親を幸国辺の刀鍛冶つぞや御殿の

御給仕に思い染めたが刃の因果。皆母の刃

のいたずらかうーー

御奉公も成り難き　年頃られた御二

人様に我が子の御女郎の外抱　空恐

ろしい不幸の罪、お許しくれて下さりませ

五　オコ娘よう折明けて云ふて呉れた　しこの

方のお名前は

楓　サア　ふとした事からお名前も国で障さへ

注くしに天達ふまでの印ぞと竹笛に残

3 此のたん力

（家の人よりの知らせを出し）

楓　其後にお伺がいまことが五郎が成人の後ち

（此の一品　証據として行衛を尋ねて下

さいませ

女　オヽ先達てしやんふ斯う云ふ確かな証據

が有れば　（名前は知れず共此度尋

ねて名乗りをさせう。必ず心配せまいぞよ。

楓　う嬉しうございます其方詞を聞くと上は思い残り

はございぬ

清　アヽ三度其様ふ思い事必ず云ふてたもん

ふや五郎の事は安心して早う達者にかつて

勝山通三　玉井製

下されや

楓　母さんもこうぞ五郎を一度逢ひたい抱かせて下

さり度也

清　乳を含ませてやるがよいぞよ。

楓　オヽ五郎は彼今母は無いとても父御の行

衛を尋ね出し立派に其名を挙げてたも。

母は草葉の陰からそふたの功をば守り舞ぞ

ト楓は ハツトりとなる。

五　之れ嬢何うしやつた。之ゆ嬢、嬢

清　気を慰めに持ってたも嬢、楓やーイ。

楓達は絶命す。

幽　此の間陰ケ年経過の事

第九段の行末を頼む（小田原街道）

小田原街道の松原。五太夫は順礼姿に

七慢瘤に働き、同じく順禮姿の五郎へ

当時十才）に手を引かれて杖を突き出で

来り

五郎　お祖父さまは、まだ痛みはかをらぬのへ。

五太　イヤ、そなたの御落胤で大分の形に成た様じゃ

疲で曽らく休みで行くと仕様。

五　それぢや俺がさすりて上げようよ。

ト五太夫松の根に腰を掛ける五郎其の

背をさびる

五太　そりゃもう家で休みすぎるかもうを

勝山通三　玉井製

五郎　アイく。

ト五郎五太夫の傍へ腰を掛け。

五郎　そうして おぢいさま。お父さまの御家は未

だ遠いのへ。

五太　エヽ……イヤ親人の家は東国で刀鍛冶と聞い

た故やがて知れる事があらうとは云ふものゝ毎日

々々尋ね探せど今以て知れぬと云ふのよ

くく尽きた親子の縁……イヤそう雲も

あてじやわへ。

五郎　そんぢうお父さまに逢はぬまでは……

ト泣キ、伏す。

五太　アヽコレく泣く事はふいに配する示来のぢ

いか（念でも、是は さこで置くものい、夫れにつけては 迫り合ふに大事ふ証拠はみの短刀。

ト腰にかけたる風呂敷包みの短刀を出し

五太　今のうちそなたにやる。確かり持って居やうぞ

五郎　そんなら其の刀を持って居たらお父さんに逢はれるのかへ。

五太　オ、逢へる夫〳〵。死んだそふたのお母アや婆さまの思ひでも此度逢へる時があらう。サア

愛へ来い

ト短刀を五郎の脊へ結び附け

五太　サアソロ〳〵と出掛けやう。

五太夫急に差込み苦しみ倒れる五郎

彫山通三　玉井製

びっくり

五郎　モシおぢいさま、気を確かに持って下され　モシ

おぢい様いのう……

五太夫刑絶する、五郎縋り付き、泣き叫ぶ女時鶴屋甚兵衛旅行姿にて通り

掛り女の体を見て

甚　オイ〳〵何うーた。ヤッ病人の様だぶ

五郎　おぢいさまが死んで仕舞います。モシおぢさま

人助けて下さりませ、

甚　そいつは大変だ、よし已れが押へて居るから早く

水を汲んで来い、早く

五郎　アイ〳〵

ト五郎は順禮の桶杓を持ち小川より水を汲み来る。

甚　コレ爺の父さん　コリヤ道ゾ祢の帝符だぞ
サア確かり仕ふせ〳〵。

ト水と御符を合せ外抱する。五太夫

斷くんけばく

五太　オヽ孫よ。オヽッ何れの御方様かは存じませぬが御手厚い御外抱、ア有難う存じ
ます迚も助からぬ私の命、女の孫めが行末を御慈悲でムリ願る。ムリ願る。

ト手を合す。

甚　心配ふさんな已は鎌倉雪の下稲屋の甚

勝山通三　玉井勝

兵衛と云ふ者だ。道了祢（お髭りしての帰りがけ　お前も外抱する云ふのも何かの縁だ。引受けたから安心しふせへよ。

五太　ア、……五郎……よ　ヨ……直居で……居てう呉れよ。

甚　こりゃつまらねえ事を云ってねちゃいけねへ
しっかりしふせへ

ト甚兵衛五太夫の手を取り肩へかける

五太　夫ッとトリとふる。

五郎　お祖父さま……（と縋りつき泣き入る）

甚　オヽ可愛想ふ……事だア

第十　稲屋の脱白小僧（行灯伝兵衛仕事場）

後に兄弟子の定吉鋼の前に横座に
座し弟子の留吉、三太、両人向ふ鉋通
りを鉋ちゐる。
桐屋の小僧五郎市、牛稲、古釣瓶等
もかつぎ

五　桐屋――タガの仕ロへ、桐屋――。
ト呼び作ら出て来る。そっと窓のぬを
窺き自分の持って来た釣瓶を台にして
覗く。仕事場に三人は刀を鉋ちゐる。
五郎は窓より首を出し

五　ヤア相変らず尻ぴり癖をやってるふ困ったも
んだふア

定　オヤ桐屋の小僧奴亦来やがったナ

留　うぬ生意気な面を吐すと承知ア仕ねへ
ぞッ

五　だって尻ぴり癖だから尻ぴり癖ってこふん
だ。後のぬの紋文さんは上手だ　お前達
は下手だふア。

定　オヤこん畜生ふざけた事を吐のすと叩く
ぞ

五　お前達が来るぬにゃ俺らの方にも定がある。
からとっとの昔に逃ずて仕舞ふさ。

留　野郎モウ勘弁が出来ねへぞ

ト 笛造侍ちたる鉦を投げ出すと
五郎驚きて窓より向れ傍への松
の木に昇りて身を隠す。
笛造出で来り四辺を見廻はし
笛 いまくしい蒙古だナア
ト つぶやきつゝ退場、
五郎 松の木より飛び降り舌を出
し面び窓の下へ忍び寄る。
仕事場へ笛造立腹の体にて入り来
る。 定吉見て
定 どうした笛、 怒まつたか。
笛 兄貴駄目だあんな素ばしこい餓鬼は有

りや仕ねへ。 ト うゝ逃げて仕舞つた。
定 さうだらうあんな小僧に構はねへで早く
矢の仕事を上げて仕舞はねへと又親方
から大小言だぞ。
モウ一息だ確りやれ〳〵
ト 三人又ヨや仕事にかゝる。 矢の時五
郎面び顔を出し
五 ヤアヌ此ぴり腰が始まつたナ
笛 オヤ矢野郎
ト 窓の内から五郎の手を確つかり押へ
笛 モウ今度は逃さねえぞ。 オイ 三太
表へ廻れ。ぶん捉かまへろ

長　合点だ

ト急ぎ退場。

元の窓にて五郎は腕首を捕へられ苦しまぎれに留吉の腕へかみ付く。

留　アッ痛ッ

ト叫び手を放す其の隙に五郎は一散に逃げる。其処へ三太出て来り五郎を追の掛ける。

留吉も続いて出て来て追い掛け遂に五郎を両人にて捉まへ引ずり来る。

五　御免よ〳〵モウ云はないから勘忍して

お呉れよ

両人　ナニ、今更勘弁が出来るもの。

と両人にて打ち振へる　其処へ定吉出て来り

定　コラ〳〵二人、モウ好い加減で勘弁して

やれ。

長　コンナ餓鬼は後日のコラシメだ。

と五郎説び入るを両人にて打ち振へ

んとする時窓の内より行光顔を出

し

行　コラ〳〵騒ぐな。其那小僧を捉へて牛荒

ぶ真似をしてはぶらぶらはへぞ

定　オー親方だれ〳〵と西人を頼め

定　親方聞いておくんふさい。実は此処に居る小僧が毎日毎日の外へ来て此奴等の仕事を見ちゃ居り居り〳〵と悪口をゴやあがるもんですから二人が怒って折柱をーて居る処ふんで

五　お前だってあんまり巧かあわえや

定　オヤあんふ事をゴやあがる

行　まあ待ちねへ〳〵そりゃ小僧が豪い。小僧のゴふのが尤もだよ

定　ジョウル談じゃムいますけんど親方迄ゑんふ事

勝山廻三　玉井製

仰有るおや困ります

行　それでも我が目からそう見えるから……

小僧貴様人の事を悪口云ふ位ではおっとは

五　さうですねへ、爰に居る屁ぴり悪の人位い

にゃ折てふい事もありますまいよ、

行　何を吐かーやがる、畜生まだあんふ事を

まあ怒るふ〳〵　夫れじゃ小僧爰へ来

入れ　一つ折って見ろ

五　エッ、夫れじゃ折たーて下さいますか嬉

しいふア〳〵

定　其の代り折ち損ふと承知はーふいぞ

サア 這入れ 這入れ

ト 定吉、留造、三太、五郎を引立て元の

仕事場へ這入る。

行元上手に座し居る 三人五郎を出

い来る。

行 定吉貴様其小僧を向へ廻して一つ打たし

て見ろ

定 並新ちゃー行。 コリ小僧支度もして稽

かりやれ。

五 大丈夫です 未だ光れぢや定さん巧くやんね

へよ。

定 あんな生意気な事を吐いやがる。

是より向ふ鎚に廻り定吉と共に刀

を打つ行 見やる三人其の内半二の驚

き呆れる

行 小僧もういゝ 成程人の悪口をゴチ程あの

通り体の横へ槌の大仕方 実に見上げたものだ

そうして今迄何処の鍛冶屋に奉公して居た

かだろう。

五 私は横町の小僧ですから何処の鍛冶屋に

も参りません。 鎚を打つのは始めてです

行 行の〻今日が始めてだ。 コレ定吉始めて

合点 何と 覚べ水店ではよいか

三　イヤモウ、北の小僧どうして銀の持ち方も
覚えておいたのだが
五　ハイ、私は刀鍛冶になるのが望みで毎日々
々御免の店で皆様の仕事を見て覚えに
のでおりますると、モシ叔父さん何うか
私を親方の弟子にして下さいませ
行　ウム好きこそ物の上手なれ、なるほど弟
に依っては弟子にしてやるオイ。ものでヨホド
が一廉貴様の主人にも相談しなくては
何とかして遣はさう
土　そんなら内の親方が承知したらお弟子
にして下さいますか、なるほど叔父さん

道ぐに桶屋へ行って掛合って下さいまし
行　ハテ忙しい奴だ、夫れでは急に角行くと
仕様か。
第十一　行光五郎を弟子とす（桶屋見世）
爰に其兵衛仕事を為し居る処へ行
光入り来り。
行　ハイ御免よ。
甚　是れサ〳〵親方でおりましたか、サアどう
ぞこちらへ。さうして何で御注文でも。
行　イヤ注文では無いがお前さん所に五郎
と云ふ小僧が居る筈
甚　ヘイ居りますすが何ぞ御用で

行　実は其の小僧の事に就いて少し計り庫
いて貰い度い事があって
甚　エーッ廻方どうか勘弁ふすって下さいまし
彼奴位い仕物の奴へ必ずムリオせんので叩
き出さうにも小田原から拾って来たので帰
す処は無し困り切ってゐるんでムへます、ど
んな悪さを仕やがったか存じませんが、行う
か充分にお懲らしふすって
行　オイ〳〵其兵衛さん、お前は何か感違
いをしてゐる。　実は小僧が私の所へ
来て云ふにや　刀鍛冶に成って見度いの
ら是非弟子にして呉れと云ふのさ、

お前さんの方で不用の小僧から何を手
放して私ども方へ呉げる訳には行くまいが
甚　そいつは有難ふムへます　私の方ぢや
頼っても無い幸いだんで何うか今から
でもお連れ下さいまし
行　そりゃ早速の承知で何より有難い
併し今小田原から拾って来たと云ふす
つた物だふ
甚　ヤア夫れに就いて良い話がムへます
で、実は去年の春　私が小田原の道
3町へ参詣して帰りの途、六十計りの
順禮の爺さんが、あの小僧を連れて松の根

方でウンくと苦しんで居るじゃムへません
か、余り可愛想にかりやしたから御待
を呑ませまして外抱しました処やっと気は
附いたが孫に口は聞けねえんで何人でも生
れは京ださうで何うか其の孫の行末を歎む
と泪たりに手を合はして往生をしてるひや
ーた。餓鬼は内へ引き取って小僧に使って
居らんでムへますがイヤモウ手古摺のて屋
んでムへます

行

ア、オウか夫れはまあ好い功徳をしてやん
ふすった。夫れに就ちやほんの少しだが
あの小僧の養育料、何うか有難さ

人の方へ納めて置いて下さい。

甚　イヤ〳〵何と仰有ってもこりゃ頂けません

（お人御同行　五郎小僧より出で）

五　桶屋の親方遠慮仕ないで貰ってお置
きなさい。

甚　エッ郡郎其所に居やあがったが

五　鍛冶屋の親方有難ぶりまする

行　あ、五郎今日から貴殿は私の弟子じゃ
ザア其兵衛さえ是非共是は納めて下さ
い。

（行者無理に金を渡す。五郎喜び
礼を云ふ。）

第三五郎親子の名乗り（行光住居）

爰に行光新太郎（十三才）対話、お秋

は新太郎を連れて父石原之丞の処へ

行って来ると云ふ

行光は男に宜しくと云ふ、お秋新

太郎退場

行　アヽ何だか今日は肩が凝（コッ）てならぬ、オイ誰

か居ないか

五　ハイ〳〵

ト五郎下手より来り

五　親方何を御用でムリますか

行　オヽ五郎か気の毒だが二ツ三ツ肩を叩いて

勝山通三　玉井製

呉れ

五　ハイ畏りました

ト五郎後に廻り行光の肩を叩く

行　ふて五郎、月日の立つのは早いものだお前も

桶屋の内から貰って来てもう彼是一年だ

何時かは聞かうと思って居たがお前の生れ

は京ださうだが何うして両親は遠者で居る

のかな。

是を聞き五郎泪にくれる

五　ハイ其の両親の顔は知らず。私の小さい時

母さんは死んで仕舞ひ父さんは今以て行衛

が知れないのでムリます

行　何お前は死んで親父の行衛が知れない
と、　そう言ふ事は直ぐから貴の訳も話して
呉れ、コレ泣いてゐないで何うぢや〳〵　おれは仔細が解らぬサア

五　ハイそんぢうお話申上ます。親方聞いて下さ
いまし　（女中より浪花節）
生れは京都の出窟辺でお母さんの顔は
知らずお祖父さんの手一つで育子屋へやつ
て貰ひ貴の行き帰りの途中では友達の子
供達に親の無い子だの父無し子といぢ
められるが何より悲しく何をかくそう母と
云ふの身去る上方の仔屋敷（御安中奉公に

勝山選三　玉井創

上つて居て〳〵た事から東西辺の方
鍛冶と云ひ交へ只の（夜で西泉の鍛冶名を
も安かず別れ〳〵が後日の姿を貴つた人殺乃
是れを即に等ひ合ひ親子の名乗りをさして
呉れと云ふかこれはあに息が絶え（夫れからお
祖父さんとこの人でお父さんに会ひ度いと貴
殺乃を証拠にして廻り〳〵たのでムります
3。
行（詞）ム、車さば車く程良れふ身の上さうして貴
の短刀とやらは。
五（詞）ハイ、大事に持って居ります。
行（詞）ム、そんぢら早く見せて呉れ。

五(詞)ハイ　御覧ぶすって下さりませ

ト懷中より短刀を出す、行光見て驚き

行(詞)オ、是ぞ正しく、ム、さては(夜の情け

にて子迫詰めて相果てしか、ム、コリヤ

五郎・若しやそふたの母の名は楓とは云

はふんだか

五(詞)正ッ　何ラーて夫れを

行(浪)知らいでふらうか　そもそもが尋ねる父と云

ふのは　何を隠さう　夫の行光

五　エエエエ……

行(詞)サ、其の驚きはたも乍ら夫の短刀は私が

鍛へたもの、斯る証據を持つ上は正しく我

が子に違いは無い。

五(詞)エ、ツ　そんふらう日頃尋ねる父さんか。

行〃　枠であったか、

五〃　お父さん

ト縋り寄る

行〃　オ、ッ

ト引寄せる

五〃　お懐しゆ……ムり幷。

行〃　親は無く共子は育つ……　能くぞ成長

致したふ

(浪花節終)

ト両人相抱して泪に暮れる。

廊下にお秋新太郎を連れ立聞く。

第十三　お秋嫉妬の怨言（合お秋居間）

後にお秋は火鉢を抱へ煙管を吹に思案の体

傍へに新太郎春駒を持ち遊び居る。

秋　新坊や　我が子い、子ちや程にお女さんを如何へ呼んでたもや

新　アイ〳〵

トお秋立腹のこふし、新太郎は急ぎ立去る。

秋　アゝ焦ったい、妾ーや業がにへて――どうして見たれよう。

トお秋煩悩立腹の体、　行光来り、

行　オゝお秋お前、何時の間に帰って来たへ

秋　ヘン、何時帰って来ようと妾の勝手です、　夫共

敢って来たのが悪ふムんすかへ

行　何だかお前大層怒ってゐる様だね

秋　是が何うして黙って居られりやうぞえ、　ねえ

お前さん。今では左ヶ丈夫と云ふ仕官

を更けて立派ふ者鍛冶に成ったのは誰

のお蔭かやと思ふてかや、

行　つまらぬ事を云ふぢや無いか夫れは皆

森川右馬之丞殿の御厚恩と私は一日た

って忘れた事はありませぬよ、

秋　ヘン旨い事ばっかり、其れ忘れ無い者が
かくし子を拵らへ、イエサ　あの五郎は
体誰のソデ　ムんすぞえ

行　エッ　それぢや今の様子をば

秋　知らまいと思ってもそう旨くは行きません
イ度今から十三年前京都へ上る時お前
さんは何とお云いでーた。
今度は恐れ多くも大内の帝守り刀を折
つんだからと精進潔斎を清めて行った
のは何の為めで　ムんす、それも事あらう
事かあらまい事か、大それた京の女と、
エ、モウ　妾ーや　腹が立つ〳〵。

ト武者振り付く。

行　コレ　お秋腹の立つのはたがやが是には
段々深い訳る子が

秋　イエ　其云い訳を聞く耳持たぬ、大方
其女を何処ぞへかくまってあらんで　ムんせ
う。エ、口惜しい〳〵　妾ーやもうどうし
たら夫の胸が

と叫び行光の胸倉を取りこずき廻し
泣き叫ぶ。

行　コレ　お秋聞いたとあらば腹も立とうが
私の云ふ事心を鎮めて聞いて呉れ、
ト其手を放し

勝山通三　玉井蔵

行　今迄隠してたのは皆私の過ぎだ、女の折京へ
上った時若気の至り二つには呑まぬ酒を呑
んだが過、五郎を我子と知ったのも今日
の今、何でせを隠して置のうぞ、其の
母親は産後のふやみに五郎を置いて欲へ
らぬ旅、今は便りも文もも無い者、私の
罪は重々詫びる、コレお秋、勘忍して
くれ〳〵。

秋　そんからアノ五郎には母親も外の身内も
無いと云ふのでムんすかへ

行　木から落ちた猿同様、八幡様を誓い
に立て何で私が偽りを云はうぞ、どうぞ
疑晴らしたい、今日から新太郎同様
に五郎を夏の我が子と思い何うか育
てゝやって呉れ、其代り新太郎には相
州流の湯加減譲り我が家の家督相
続させよう、お秋
女の通りやノ〳〵

ト行先身を悔い手を下げて詫る。

是にてお秋稍心の解けたるこふし
秋　其の詞に屹度間違いはありませぬのへ
行　何で違えてよいものか、
ト女時近吉多治三太五郎を連れ来
り

勝山通三　玉井館

定　親方ッ

トミふに行先物り涙をかくす。

三人　御目出度うムりまする。

第十四　生傷の絶間無し（行先宅台所）

炭にせやお作場板をとび樽の下より

炭を出し、炭取りへ入れ居る。

奥よりお秋出で来り。

秋　お作や山炭を出したらお前は茶の間を

片付けて呉りやれ、

作　はい畏りました。

トお作、炭取りを持ち退場。

秋　それにしても五郎はどうして居るのじゃら

うふ　あんふに憎らしい餓鬼ちゃア

ありゃ　しふいよ。

ト四辺見廻し夫れと顔き樽の下の藁

をわざと明け置き、

五郎外より荷ふい桶ゐて水を汲み擔

ぎ入りて来る。

秋　五郎ッ　お前今まで何をしてゐたんだよ……

五　ハイ。お母様が水を汲めと仰有いましたか

ら只今汲んで参りました。

秋　スーても口答へをしくさる、それっぱっかしの

水を汲むのに、いつまでかかってゐるんだへ

一寸用があるから直に炭へお出で　早く炭

勝山通三　玉井製

へ帰出と云ふに、
是まで五郎側れ水をこぼす、
秋　オヤ〳〵お前水をこぼしたね　あゝ合つた。
ト五郎　チラリく立去るを後から激し
く突く。是れにて五郎板を踏みは
ずし樹の下へ片足落し痛さにわつと泣
き入る
秋　エヽ又メソ〳〵と始めたね、いつまでも泣いて
ゐるがいゝや　意気地無し奴　サヽ見やア
かれ、
ト お秋要らざる空うそぶいて奥へ入る
五郎　起き上らんとして痛さに上られぬ

故の時足音出て来り夫れと見て驚
き抱き上ける五郎の向ふずねより血
汐流れ居る。
第十五又復継母の折檻（お秋病間）
爰にお秋寝床の上にくゝり枕に凭り病
人の体、七草のお作肩を揉み、傍へに竹
太郎居り医者竹庵、薬を調合ふし終
りし体。
竹　御新造様是れが煎じ薬でムるが早速召し
上つたらお熱も取れるでムらう。
秋　夫れは有難ふムんす、新太郎や此のお薬を
台所へ持って行って五郎に急いで煎じて来

勝山通三　玉井創

る物に云いつけてたもいの。

作　イエ、お菜から私が煎じて参りませう

秋　イエお前ではいけないんだよ　新坊早く持

ってお出と云ふに

新　アイ〳〵

ト新太郎菜皿を持ち下手へ退場

秋　それから先生、妾頃ちっとも眠れずくて困

るんですが、お薬はいくら掛っても構いませぬ

程に夜眠られる物ふ良い御薬はムくせぬ

かへ。

竹　そりや無い事もムりませぬが聴り菜を申す

とお上から御法度の秘薬で容易に差上げる

お菜ではムらぬが外ふらぬこちら物の事故

極内々で調合致すが其の代り一腹以上召れ上

ると大変ふ毒にふります御注意をふさらんとふ

秋　エッ、夫れぢや毒に……まあ左物でムんすか

そう云ふ御菜ふら度々と申しても御面倒で

ムさんせっから五六服一辺に御調合を御願

み申します。

竹　承知致し上ではは明日にでも早速御屋け申

さう、愚老は是にてお暇仕る

ト見にてお秋はお作に命じお作菜礼を

持ち竹庵を送り両人退場

勝山通三　玉井館

（仙吾郎いに五郎茶瓶を盆に載せビツ
コを引キ〳〵出来り

五　お母様お茶を煎じて参りました。

秋　オ、五郎かい、御苦労だったね、気の毒だ
が爰へ持って来てお呉れ　オヤ〳〵お
前必ず足つきをして何を思案顔をして居るん
だへ　茶が醒めて仕舞ふじやないか、

五郎傍へ寄り

五　ではお母様お茶を御召りなさりませ

秋　ア、有難ふよ、

ト茶茶碗を取りて振りをしてわざを叩
き落す

五　アツ、飛んだ粗匆を致しました、
と畳を拭ふをお秋疑視み附け

秋　何だえ、粗匆だって空々しい事を御云ひで無
いよ、お前は大方ふんだらう　妾とはおさ
ぬ仲故邪ケしてふらぬ故一百でも早く死ねが
しと茶を呑ませまいと わざと落したに違
いない、

五　イエ〳〵何で其の様ふ事が入りませう、御免
なされて下さりませう、

秋　御免なさいは聞きあいた、サア爰へ御出で エ、
強情ふ子だね　お出でったら来ないかへ

ト床より這い出し襟髪を取って引き付

勝山通三　玉井製

秋　お前の様な強情な奴は斯うしてやるから
覚えておいでさよ
ト五郎の説伏るのも構はず煙管で散
々にぶち据え
秋　エヽモウ顔見るのも病気にさわる早くあっち
へ　（ト突き放ち）　行きくされ
ト横々ーき云い分、五郎わっと泣き
入る。
第十六　序幕中に水行す（井戸端と山口）
外本……冷後の愛は次第に降り積り身内も
凍る真夜中過ぎ五郎はさっと忍び

足忍足（アシダ）何ひ独り言
ト勝手口を明け五郎は忍び出で四辺何ひ窺ひ
言
五（詞）あゝ寒いふア　（デ雪）　斯ハーて毎晩お参様
の病気を直さうと八幡様へ願を掛け今日で七
日の満願に少しの利目も無いと云ふのは神様も
私の迷には無いものか情無い事ぢやふあ、
外本……母を思ひ身をかぢり　神を恨むぞ
哀れ涙ふる　五郎は此度心を定め
五（詞）否々未だ今晩（一晩）あるものを勿体ふや神様
を怨み申すは恐ろーい　少しも早く御願ひ
申さう　そうぢや〳〵

外本……然いうだやくと健気にも寒さを厭はず
脱ぎ捨てる衣類も何の身につに震へる
足を踏みしめ〳〵蓙足に凍る井戸の
側
ト五郎は衣類を脱ぎ捨て凍る双手を
に当て震へたら井戸側へ寄り合掌ふし
五郎もうし八幡様、何うかお母様の御心能け(直)も
早く御病気を御癒しふされて下さりませ、
南無八幡様〳〵〳〵〳〵。
外本……(心ふつたる孝子の願望、因果は巡
る車共戸、汲み上げ汲み上げ打
ちかぶる五郎は井戸を振り絞り、

五郎南無八幡様、〳〵〳〵、願ひを叶へて下さ
り度、御願ひ申し上げます。
外本……又も立寄りくる〳〵水は舷を
舷氷　今は堪え難なよろ〳〵〳〵
倒れ伏したる有様は無惨(ザン)と云ふ
も哀れなり。
矢方はそれを白河の夢を破られ足
吉が……
ト足吉布子の寝巻きを着て半纏より
寝呆け顔にて出て来り。
足吉アー（ト欠伸）好い心持に寝ついたが宵
に一杯やったせいか　小用が近くふってふんねへ。

ドレ一ぬきーて来やうか

作本……つぶやき〳〵立寄る戸口、明くれば

サツト吹込む風

ト定吉が雨戸を明けると外より雨吹き

込む、定吉物凄り飛び退き

定詞おゝ寒い……ヤツ何時の間にか大雪

○積りやがつたぶ、道理で身体が冷える筈

だ

作本……所から湧ゆる水の音

定詞此奴は妙だ、真夜中に水の音どうやら井

戸の方角だが不思議な事もあるもんだぶ

作本……不審ながらこの透〳〵見る

後に五郎再び水を浴び倒れ居る体

勝手口より定吉首を出し伺い居る

五郎今日が旨の仕事が満願、斯うして居られ処

もうレ八幡様、御願成就、命共の身は何うなろう共

○一命、代へて母様の帯麻苧蘭一て下さりませ

南無鎌倉八幡様 ゝゝゝゝゝゝ

作本……唱ふる声もうらがれてよろぼい〳〵

立上り又坂り縋る井戸の縄、夫れと

見るより定吉は

定詞ヤツ五郎さんだ ト驚んでもねへ事をしち

やゝんねへぜ

ト抱き留める

五(詞)イロく放ーて

外本……閉めるを忘れ後ケ瘧放ーて度々の〜

念入みとゝ水は氷か冷の中、ザンブと

浴ぶれば定吉も共ハに濡れ鼠、寒

を伏ゝ、(然)辰え次ら(ナガ)も志かと抱き抱へ

定(詞)コラく五郎さん、滅多ゝ眞似をしちゃゝ

山ねへよ、

五ゝオゝお前は定さん 勿めずに放ーて不さり、まも

定ゝまゝく待ちねへ、コウ五郎さん お前はまあ

何と云ふ感心ふ子だらうゝ

今彼樂聞いんねたが女の寒中に水を浴び夫

夫が命を捨て迄 あの継母の瘧気を

知つもせずに癒さうたゝ実に見上げた女房の

孝心、後ア聞いんねてさえ悲ーくて泪のとゞめかあ

リアしふハ、其の孝行かーんで アノ鬼の様ふ継母

のこゝふ邪理の角も折れ病気が直ちに蓋いね

へから最うそれで沢山だ

結那眞似ーて女房の身に巻もの事でもあ

ら才一お丈さんに不幸に不る也

十 解ったかへ、是れから俺の部屋へ行き温め

て上ずようから内へ這入って寝るがいゝよ

五(詞)あいそれぢや定さん今夜の事は父さんにも母

さんにも外の人にも内所にして話をすゝのは止ん

不さいませ、

定　御可い衆〳〵僕ア決して誰にも云わしねへの
ら心をするがいい、や、何にしても女の意地
や仕方が無い、オヽ幸い僕の是れを着るが
ヽや、
五ゝ　だってそれじゃや定さんが寒いだらう
定ゝ　何の、お前さんに較べりゃ寒い事があるもの
かね　サアサア早く着るがいいぜ
五ゝ　定さん、お前の親切は忘れませぬ、女の通り
情禮を申上げます
外ーーー　今ゑる手先に伏拝む　定さん　樊らず
抱き寄せ
定　御オヽツ、五郎さん　お体ねへ〳〵お前

さんに其那事をされちゃ僕らに罰が当た
りますよ　サア　頂ヲ上げるから背中
へ、

（休憩）

〳〵女の向台本二頁無し。

第十七　お秋（愈〻五郎を憎む（元の病間））

〳〵男真にて宜敷く頼み舞。

定、エ、い、ヱ方だって其奴アいけねへ、いっそのの
事早く、くたばって、ヽヽ否何早く癒ら
ぬちゃいけやせんね
秋　オヽく定さ、お前一体後へ何しに来たの
へ
定　ヘイ実は何です少し許りおかみさんの所

勝山通三　玉井製

耳へ入れて置き度い事がありますんでね
お神さん貴女の今度の病気はね　四討が当
つたんでムへますぜ
秋　何んだへね　四討だつて……　お前何を御承
けてゐるんだえ、
定　成程私も計りぢや御解りにくいますめへ
御話致しやすからどうか聞いておくんふ
せへまし、　可愛相ふ五郎は貴方の病気
を癒さうと八幡様へ願を掛け昨晩も
あの大雪の中で裏の井戸端へ出て水を浴び
自分の凍えつのも忘れて一心不乱に信心を
してゐたさるぢやムへませんか其那方

行ふ息子さんが何処の国にありますへ
矢れも知らずに毎日々々
◎女の前台所投げあり男真にて宜敷く
五、　おゆさま何ぞ御用でムりますか、
秋、　オヽ五郎か其処ぢや話が出来ぶいから此方へ
御這入りよ、
五、　ハイ
ト怖ろく座敷へ這入り隅の方へ身を支へ
る
秋　まあもつと此方へ寄つてお呉れよ、今迄吉
に聞けばお前は水まで浴びて信心をしてお
呉れだそうだね　一体そりや誰の為にす

るんだえ

五　エツさ小ぢやアあの足さんが、実は母様の病気が一日も早く癒りますように、

秋　お黙りよ、何だって私の病気が癒る様だって、ヘンお前の信心はそうぢや無からう

　　絶い仲の私故一日も早く死ねがーと呪って水を浴びたんであらうがふ

五　否々何でえの様ふ事がムりませう

秋　いえ人くそうぢやく呪い殺さうとーたに違い無い、よくもく小供だてらに大胆ふえの様ふ事をしくさって、爰へ来て殺してお呉れ、早く死ねへ消出と云ふに

五　アレ待母さま　どうか勘忍して下さい来た

秋　堪忍も好く出来た　サア此処へ来ふいかへ

　　エ、剛情ふ蓋生だは

　　ト傍らの鉄瓶を投げる、鉄瓶の蓋五郎の眉見へ当り血汐流れる、

　　五郎アッと叫び転ぶ、足吉飛り出で五郎を抱き起し

足　オッ、五郎さんタ大変ふ怪我を仕ふすったナ

　　ヤイ鬼婆奴、罰当り奴、よくも俺を欺ったぞ

　　ト五郎袖を引く、

　　ト五郎さんに近乱暴ふ真似を仕やアがった

定　いゝよく五郎さん、心配しふやんな、他那
悪姿にやあ……。　ヤイくたばり損ねへ
貴様の鉄鬼の新太郎にゃ（オカマ）お鶴（くるみ）の
栄耀栄華、如何に生さぬ仲だあ云へ女
の寒空に、五郎さんにゃ汚（ヨゴ）れ腐（くさ）った袷一枚
それさへ、我慢をしてゐるに泣言ばかり何
事だ。もうゴ箇ふぬへぞ……　五郎さ
ん打捨って置きねへと云ふに。
秋　オイ〳〵定吉、油かすでもふめたと見えて
大層口が達者だね、　変しゃお前の亭主だ
よ、失礼な事を言ってふいよ。
定　何、亭主だと、イヤ　今日から立秋に暇

を貰った。暇さえ取りゃ五分と五分　見ル
からば俺が相手だ　五郎さんの代りに貴様
の面叩き破るから然う思へ
五　アレ定さん待ってお呉れ皆私が悪いんだ
から、どうか我慢をして下されや、
定　もう勘忍袋がはち切れたんだ放して呉
んねえ、放して呉んねえ
ト定吉が立ち上りお秋に打って掛らん
とすると、五郎、某中に縋り留めんとす
る、騒ぎ中のお作出来り五郎と共
に一生懸命にて定吉を無理に一間へ連
れ去る。

勝山通三　玉井製

秋　えゝまゝくしい蓋だ、今にどうするか見
やあがれ
ト時とゝやから新太郎樂屋みと入れ
たゞ袋を持ち出で来り
新　お世さん今お客様のお眠りなさ
居たと
秋　オ、市苦労だったね　サアく早く市出で
お前は五郎と遊ゝ本堂に待行者　さあ
秋の御菓子を市召りよ
新　それからね御客様のお小さは秋の茶は
濃い茶だから、たゝと呑むと金に係るって
さうおって紙つたよ

秋　ア、然うかい、
ト菓子を出して小供に与へる。
第十八孝子身を投ぜんとす（田井ケ浜）
爰へ五郎は腹空てよろ〳〵と泣く〳〵
出で来り四辺（アタリ）を見廻し小石を拾ひ袂
に入れ傍らの岩に立ち、
五、お父さんどうか勘忍して下さいまし南無阿
弥陀仏。
ト将に斯うよと見えたる時　秋の前よ
り行夫の義弟新発田光　全せ房お
りつ来り　秋の体を見て驚き
田光急ぎ五郎を抱き留む。

国　五郎ぢやないか　ト叫んでも無い事をするぢ
や無いか
五　エヽ　さつぱたは叔父さん放して殺して下さり
ませ
国　馬鹿な事を云はないで、エヽ待て待ふ
たら待ちねへ、コレおりつ五郎を確か
り押へて居れ、
ト山右エより砂地へ突きやる。
おりつ下にて抱き留める。
国光も続いて飛び降りる
おりつ五郎や、お前はまあ何だって然程真似
をお仕ふんだへ

国　大方深い訳があらふ　安の叔父さんが
目付けたエは決して死ぬには及ばぬぞよ
おりつ　おや　安の子はまあ大層痩せ細って何
うしたと云ふんだへ
国　アツ、おりつ五郎を見や五郎の顔に大変
な疵がある也
おりつ　まあどうして然程疵をお仕ふんだへ、泣
いてねへは仕方が無い、サア訳をお話よ
国　訳を聞くにや及ばぬ、奴奴アてつきり鬼婆の
仕事に違い無い、如何に生さぬ仲とは云
へ、むごい事をしやがつたふ
五　ア、叔父さんエの疵は柵から鍋が落ちた

のでムリオオする。

国　いやしお前がいくら隠しても俺にゃちゃんと
分ってゐる。　モウ今日とふ今日はソウ簡
ふらわへ、　オイおりつ、俺は五郎　也　へ
連れて行かう、お前は是から雪の下へ行って
兄貴を直ぐに連れて来い、
おりつ　アイよう合んすす、夫ルやく五郎を頼みま
したよ、

ト行かんとする。

ア、叔母さん待って下さいまし

ト縋りつくを

コレお前は俺と

勝山頭三　玉井製

ト無理に引戻し

国　一所に来るのだやや。

第十九　往来中で兄妹喧嘩（雪の下所鄰ル）

りつ　エ、お前は兄さん並しや口惜しい、
真ぐにゆへ来ておくれよ、

行　ア、お前は妹　何だめそ　泣き出して
ア、解った。又相変らず夫婦喧嘩だか

りつ　何でもいゝよ　ゆめ（さへ来りゃ解るんだから
サア　妾と一諸に来てお呉れよ、

トおりつ　行光を引張り両人　手を
退場。

木陰より石馬之丞出で

板、今のは慥かに聲の行者、偖ては兄妹、さ
かい、コレヤ仲哉をとおばふらまい
ト右馬之丞面白の顔を遂か。
第二場 同次郎の宅 (同老住居)
爰に火鉢を抱んで国老五郎対話
国 五郎よく打ち明けて話て呉れた、実に
前は感ぶる者だ、今お女さんを呼びにや
つた程に僕が充分に聞かせてお前は
奥へ引取るからさア安心するがいゝぜ。
五 有難ふ御ります、だが叔父さんお母さま
はどうか悪く云は無いで下さいませ
国 エッ コリヤ五郎散々いがめられた上未だ
あんふ事を云ふのかや
まあいゝから万事は叔父さんに任せて置
け、オ、ヤット茶が沸いた、喉腹が空いた
だらう、サア是を持って奥へ行き、腹一杯
食ふが好いぞや。
五 夫れぢや叔父さん御馳走にふります。
ト土瓶を持ち奥へ入る。
国 夫りにせけても行先は何をしてゐやあがる
んだらう。
ト待ち兼ねたる折柄、無理に行先
を引立て、出で来りみへて
ソリツ お前さんやと兄さんを連れて来たよ。

トニカヘビ国光は苦り切って居る。

行　国光、其後は無沙汰して済まぬ　又何か
夫婦喧嘩でも仕たガラだが、知つての通り
のガリつの我侭、仿ふか私に免じて許して
やつて呉れ、

国　喧しいやい、誰が夫婦喧嘩をしたと云ふガラだへ

行　おゝ大層機嫌が悪いが云ふ事があるぞう
綺麗さつぱりと云ふて呉れたが好いガやめ
ふりの、

国　ヤイ行光、一体アノ丑郎はどうする心算り
ぶんだ　殺すふう一思いに何故殺しやや
らぬ　成程お前は奔川右馬之丞云

勝山通三　玉井館

ふ　姐さんに恩にふつた義理もあらうが
かゝあの尻に敷かれるのも大概にして置き
ふされ、

行　コウ〳〵国光、藪から棒にそんふ事を云は
れては　私にはサッパリ訳が解らぬが。

国　どう解らふいつ？　だから腰抜けの意気
地無しと云ふのぢや　マア好く聞きふさんよ
可愛想に丑郎は　あの男の枝ふ母親の
病気を直ーぐと云ふ一石で雪の降る真
夜中水垢離をして命をかけ信心をしてゐた
んだぞ、だからアそれを聞いた時には何
度相でく涙が止まらふかつた位だ。

それにゝどうだ あの鬼婆奴は 五郎の顔に
鉄瓶を投げつけて 大きな疵を拵らえたん
だぞ

行 エヽッ 大れなりや 鍋が落ちた そこふたのは
あのお秘が――――

国 未だ くそ 詰りなやふい、 結局は毒
を盛って五郎を殺そうと 計略計り
五郎が夫を知ったん故 今日で四日と言ふ
のは 干乾しにされて ねたんだぞ

行 エヽッ

国 サア是丈け云へば 用はねへ 五郎と親子
の縁を切って 今日から 離れ離れに

勝山通三 玉井劇

立派に一人前にして見せやうから。
午前は是から 外へ出て 明神と祭って
朝晩拝んでねやあがれ、

ト是にて行えはいと 俯向き 深い思入れ

りつ もし兄さん お前あんたにゃはれても
口惜しくは 無いかい 五郎が田井
ケ浜で 弁護士の所を 番達 夫が助け
て 来たんだよ、それも知らずにのみく
と 呑くもそうして 居られるか 夫婦喧
嘩 所の騒ぎかや 厭いよ ほんとに
五郎 堪もこをもつき果てたよ
かりつ 泣き伏す

行　エエ、国光、おりつ許りて呉れ、親子
おれば、こそ夫れ程近に云ふて呉れた
お秋が毒を盛って殺さうとまでーた
事は知らぬ。こうく我慢が出来
ぬ、此度、らちをはけるがそれ迄立
を預って置いて下され、其の通り私が
頼みだ　二人共祈って呉れ
国　よし、そう云ふ事ふら街も仕様が
一件その始末は何うーてつけるのだ
右同　カイヤ　其の始末は某がつけるで　ムラ
上左馬之丞四人入る
国　ヤッお前は森川、何で俺の家へ這入

って来たのだ
右　サア其の御立腹は御尤。聞けば聞
く程恐ろしい娘が悪心、親子の縁を
切った上、秋奴を成敗致して申訳け仕
らん、何れも方御免下さい。
行　モシ男獄それはあまり短気と云ふ
その
ト引留める。
右　エ、放せ、放せ　放して呉れ
ト行き悪人で右を振と手ふ。
国光は横はずにやれと云ふ思い入れ
此の中五郎、奥より首を出し実の体

に帰き蔵山の陰子明け一日敵に
迫り来る。
右馬之丞は行先を急き急ぎ走り
行く。
第二十一　五郎母に急を告ぐ（途中と佐居）
蔵へ五郎一散に走り後より右馬之
丞追取刀に出来り、同じく後より
り行先、国夫、おりつの三人別々に走
り出で遠く森陰に隠れる。
行先の佐居、
お秋は森後の針仕事
五郎襖を蹴飛ばし急き来る。

五、　エシお母さん大変です　今帝祖父さ
んが御怒りにかかってあなたを斬ると云
ふて御出でにふります　早く逃げて
下さりませ、早く〳〵
秋、又そんな嘘をふて私を驚かさうとす
るんだね、何て大い悪だらう、覚えゐ
ろ、
トお秋五郎を足にて折す　倒れる処
へ右馬之丞来り
右、己れ不孝者　親が手づから成敗
致す
ト一刀　抜き放す

五、アレ祖父さまは何うぞ待って下さりませ
ト縋りけく
石馬、急いで退いて呉れ　退けと云ふに
振り放しお秋に斬りつける
お秋、一目散に逃げる。
石馬、五郎を追ふ。
五郎、逃げて
行先、国元、おりつねの姿を見て同じく
後を追ふ。
第二十二　孝子の心迷ひ母の悔悟
（八幡宮石段）
お秋髪振り乱し石段に立る

石馬、五郎お秋を斬らんと追ふ
さはさせじと五郎止める。
お秋、石馬に五郎　五郎、暫し入り乱れ
揉ふ。
遂にお秋石に躓きつまづき転ぶ。
石馬、得たりと斬りかけんとする髪
五郎お秋の上に伏し、石馬の一刀勢
に余り五郎の背に真一文字。
五郎　アッと倒る。
石　アヽ　それかや　五郎をば
ト呟く。
お秋呆然たり。

行　先、国先走り共に駆ける

行　ヤヤツ　これや五郎が半紙を見ふた

　　ぬ

国　エイツ、おりつ　早く逃落を呼んで来

　　い、早く〳〵〳〵

　　アイ〳〵

　　トおりつ去る

　　行先国先五郎の刀抱を奪す

行　コレ　五郎　気を確かり持て、父っぢよ

国　我は浅い　確かりしろ〳〵

五　エ、お父さま、お父さま、そうーて

　　おみ様は？

行　お、お秋は無事だから安心ーろ

五　コレ　孫よ、許ーて呉れ　そなたに保牛

　　も見ーれも皆　我の命の粗忽

　　我の上は身代　代換ぢ　撞てーも　決　抱さ世

　　ねば置かぬよ、

五　ア、モシ　祖父さま、あなたに科は心

　　りませぬ、　私は元より覚悟の上　斬

　　られたのでありますする。

　　人三　ナ、何を云やる。

　　トあよう簾入り。

五　おあさまの帝身代りに死ぬと思った私

　　は本望。　只我の上の浄額のには、最後（イマワ）

の際にお母さまより、五郎可愛や
とたつた一言帝闕の世下さりませ。
私が妹の世の私の帝願いでムリます。

行　エ、五郎よく云ふた。よく云ふて呉れ
た。お秋、今の五郎の詞を聞いたか
邦見ル親を怨みもせず一命捨てこの
優しい心。是でも五郎を憎いと思
ふか　イヤサ是でも迷いが醒めぬかや。

秋　……お、そうぢや

トお秋落ちたる一刀にて自害せん
とする。行光留め。

行　エ、お秋、何故お前は自害するのぢ
や。

秋　何で死ぬとはお情け無い。今の五郎の
一言で今日と云ふ今日夢が醒め、何の
生きて居られませう。五郎への詫は
今目の前で、どうぞ放して下さりま
せ。

行　エ、狼狽たへたか癇気虫収、今己れ
が死んだとて五郎の命が救かるか。夫
の上武に難儀をかけるのか、エ、云ふ
称の無い、アノコ、ナ不所存虫収が
トカをもぎ取る。

秋　それでは死ぬにも死ぶにもせぬか。

鶴山堂三　玉井製

トワッと泣き伏す。

国　エ、なれでこそ誠の心　少しも早くなれ
五郎を

秋　アイ

トお秋五郎を抱き、寄せ

秋　コレ五郎　今迄の私の罪はどうぞ許し
てたもいのう

五　オオ、お母さま

五郎も縋り、お秋も抱き

若ーき対にも嫁こいに泣きくれる。

次の時おりつ医者を連れ、足吉
留造お作附添い来り　医者は

急ぎ五郎の脈を見る。

第三ノ　酒正式の使者（弁充伝兵衛　外　家臣）

五郎もわれは、右馬之丞、行充国

充　お秋、新太郎、おりつ居並び

お作、留造ミな酒をふし、五郎

が全快祝いの体

左　アレノ　酩酊致ーた。如何と思いし五郎の

牛乳も全快致ーて夜の酒宴、月共が

望みと相叶い斯形に嬉しい事は無い

ぞへ。

五　是と申すも御父さまや皆様方の常

丹精　有難ふ仕ります。

勝山通三　玉井製

秋　されに就いても一つの御願い、今日から新太郎を別家させ其の五郎に吉家の跡目を取り世て下さりませ。

国　是と云ふのも孝の徳。

り　御目出度うムります。

ト嬉しきさふし。年の頃定吉出で

来り

定　モシ親方今玄関に西国の御家の使者だと云ふて親方と五郎さんに是非御目にかゝり度いと立派ふかな侍の形ふかな方が御出でムります。

行　エッ御家の御使者だと、御町御

に御通し申せ

定　為和しやーい。

ト定吉退場

松　されでは私は暫く奥へ退散さう

皆も参るがよい。

ト松馬之亟、一同退場

五郎と行光郎り定吉の案内御家の臣江見野良三出で来り上座

へ通り定吉退場

行　コレハ〳〵ようこそ御越し下さいました。

私が吉家の主、洋行行光、まつに是れに居ります。

一子五郎にムります

お見知り置かれ下さいませう。

良三　御叮嚀に御挨拶　恐縮は御丁寧。

家臣　江見郎　良三に申す。

実は外ならず御主君様の子息

五郎殿の孝心深きを聞し召され御

公達正行公が其の孝道にあやか

る術と五郎殿に斧り刀を打たせて

呉れよとの即ち使命、次の儀御

承知下され度し。

行　次の事に余る御談。有難く存じま

するが未だ若年の侯、何卒今より

五ヶ年の御猶予下され置かれませう。

良　ム、さりや五ヶ年相経れば美事鍛へて

呉れるのぢや。

行　御詞迄もムりオ世ぬ、此の金地が出

して御刀を仕上げさすでムります。

良　早速の承引、喫驚。吾も御満足。

度詞を傳へ申すぞ。

第廿四　五郎銘刀を鍛へる。（井戸端と仕事場）

後　次の間五ヶ年経過

行光宅　勝手口元の井戸端

爰にお秋水を汲び彼方に向い合掌

し

秋　南無鎌倉八幡宮　何卒五郎に銘

勝山通三　玉井製

刀を鍛へさせ下さる様 願望成就ありさしめ
給へ南無八幡大菩薩 ムニムニムニムニ。
と一心不乱に祈願を凝らす。
行光、鎌倉八幡宮を祭り居る。
行光と五郎（ごろう大人オ）紋沙の狩
衣に武士烏帽子を冠り一心に刀
を鍛へる。
行　オヽ、美事の上ゲ鎚、ソレ湯加減
せよ。
五　ハハア
と五郎刀を風呂に入れる。
湯気ムンと立昇る。

五郎引出し行光に示す。
行光じーと眺め
行　五郎でかーし、道理名刀打ち上げ得
たぞ
（五郎面喜びと変る）
元の井戸辺 お根は水に浸べ絶
息して居る。
行光、五郎の両人出来ばえを見
て嬉き外なし。
行　コレお秋何うーして居る 確かりしろ
五　母上様五郎でムリオオる お心確かに
お持ち下さりませ。

秋　エヽ、五郎、行先殿か

行　心附きーの、ーて又ゝぶたは何故にかゝる

ボ行鉦ーて居るのぢや、

秋　サア是も皆過し年、五郎に送けた恩

返し遍ル名刀所にすゝめ、

五　エーツゝりや私の為めに世ヒ移、有

難ふぐりオオる。

秋　ーて御刀は出来オーたか、

行　エヽ、ゝふたの一念容ーからず老にも

御ふる銘刀を五郎が殺へヒぶたらぢ

ト。

五　是と申すも母ヒ移が刃に余る御奉

秋　イエ〳〵　ヒ世の半板ぢやムんせぬ

皆八情移の為すい御利益　思へば嬉ーや

（御正成館）

（御正成館）

お秋伏ー拝む。

五郎は母に刃を渡ぶる

第二場　御正成へ五郎同合す

爰に正成一子正行ハ十才ー和へ其他家

臣大勢居並ぶ。

桐の家臣近見野良三は五郎の

鍛へたる刀を三宝に載せ来る

鈴山堂三　玉井製

良ハハツ 更回鎌倉ノ住人、行光ガ一子五
郎 兼而ヨリ仕付サノ一刀持参致シテ居リ申
オル。
正成 オヽ是ハ待ち兼ネタ。予ガ御正成カ
ヲ見ル。
行光 又私ハ病男正行。よくぞ持参して呉
レたカ。
行光 直ニ御目通りニ有難き御詞。恐
レ入リタテマツル。
正成 是ハ名ル一刀是ヘ持て、許す。近ク。
行光 其ハ御前ヘ
五郎 ハハア。

五郎、御前ヘ進ム。一刀ヲ捧ゲ敬ヒテ正成ニ渡ス
正成 オヽ
一刀ヲ取リ
正成 オヽ、流石ノ名刀ハ水ヤ清リ人ヽ 天晴れ名
剣家の重宝
正行 天晴れ五郎出かゝ居ったカ。
五郎 ハハア 恐れ入ってハリマスル。
正成 斯ル奇特ヲ見ル上ハ 親子ノ者ニ報サ
ンカ為ニ 試ニ刺ニ納メル
ヤト一刀ヲ
ハリ
未度関白九條殿ノ姫長君ヲ迎フ

物の怪に離れ給い御悩みいやいや祈
祈りの正行き物の怪に見届けの役を
遂ぐ。其方に乗り移らば剣にて正行
に力を添へ見届けたる上は異れまいかの
行光ハイア 勿体無き其の御詞 斯る仰
意蒙る上は一命投げうち此の御役目勤
めますでムりますまいう。
正成オ、能くぞ申した。良三方事仕度を
致せよ
良三ハイア
下平伏オ
第廿七 定前に帰き廿性（九條殿寝殿）

義に姫高視鈴り役員に迫ル
枕頭に関白公其他侍女大勢附添
い正面は一面の御簾、菊燈、灯し
ます。
関白 コリヤ姫よ。今は悩みも あらざるか、
姫 ハイ今は少しの悩みもなし
と云いかけて。
姫は一時に灯消え
アレ〳〵又も私を苦しめらは何物の
山宗ぞや、エ、慧元雑や若い者
ト姫に物の怪に襲はれ若い者
元ゴ。関白気遣いの体にて

閣
口を出せず其前の数言固せず、
侍女　ハハア
ト言せ一同後退る。
画面一転
遂に一陣の暴風起り暴風雨来り
樹木狂乱す。
空中より怪鳥一形は雑に似たる大
鳥にて、顔狐の如く、鬣長く
尾四五本長く無れ其先蛇の形をなし
す一砂を巻いて忽然十二単衣を
着たる宮女に変じ御簾の中を流
度現む。

口は耳迄裂け形想物凄く、絵画
を驚し階段に立てのけ御簾の中
へ入らんとする時任石より侍女大勢力
強力を持って走り出ず
侍女　ソレ曲者怪奇ふるぞ
怪　何も、
ト侍女を怪女の凄い折り合い
侍女数人に悩まされる。
其の時正行来り凛々しく走り出で
正行　ヤア怪しき、女性奴　御　正成が一子正行、
イデヤ正体現はし見れん。
怪　小癪ふ事を

ト正行は刀、怪鳥は絵筒にて相方
必死の斬り合い。
遂に怪鳥正行の襟をつかみ元の怪鳥
に変じ空中高く舞い上る
五郎オヽ術仏達が術力の危難、これ怪物
観念せよ。
と五郎半ばを引絞る。
第廿八 銘刀の威徳怪鳥を退治す
（空中と山中）
爰に怪鳥両じ姿と成り黒雲を
呼び正行をつかみし儘何処へか去る
んとす。

其処へ一矢怪鳥のこめかみに命
中しアッと叫び正行地上に
落ちた
怪鳥怪れし一矢
亜田一郎
物凄き山中の体
正行空中より落下 五郎走り
来り
五郎オヽ若君様、御見苦しき御姿にて御出せしの
正行オヽ五郎か汝の助太刀遅合の恐るべよ
五郎イデ安兵衛は銘刀を帯して退治して異物
ト五郎此度空を見上げ一刀を抜

き従ち、長ーけける。
是れにて、百中より怪せ者ーみ舞い下
り

怪　ウーム、信は刀の、威徳にて、我が妖術も叶
はぬか、思へば無念口惜しや方。

正行　一刀の下に仕留め呉れん。

五郎　叶はぬ処と覚悟せよ。

怪　何を。

ト是れにて、双方烈しき争闘。怪せ刀の
威に恐れ、充分に働き得ぬあふし
五郎の一刀に、肩を斬られ、正行は
の隙に、怪、後へとんずる。

怪せ正体を現はし、絶命す。
関白半ば跨り、侍せ大勢を連れ出で
来り

正成　オ、天晴れ五郎　能くぞ怪異仕留
め得たぞ。

関白　其方の働きこそ、姫の悩みも平癒せ
り。其の功に対して、今日より禁理
御番殿存に召し出し、名も世郎
宝蔵正宗と名乗り、長らく忠勤
尽くすが、妙なり。

五郎　ハッ、有難き仕合せ。

正成　是れも、偏に孝道の餘へとぞ、なる刀

の威儀、
国の実は孝行は国家の礎なるや明
ト覚す、
一同平伏す
時に鶏鳴暁を告ぐ
映画終

孝は国の礎なるや明

NRAJ